芸術の館
兵庫県立美術館
HYOGO PREFECTURAL MUSEUM OF ART
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
Phone:078-262-0901
http://www.artm.pref.hyogo.jp

QUARTERLY REPORT
アートランブル
VOL. 35
2012年6月30日発行

ARTRAMBLE

学芸員の視点 ❷❸
金山平三の人と芸術―今後のために
―― 西田桐子・相良周作
ショート・エッセイ ❹
2012年度 コレクション展Ⅰ
「美術をみる8つのポイント」―― 速水　豊
トピックス ❺
今年も開催!「第11回　神戸っ子アートフェスティバル」
コレクション展Ⅰ「美術をみる8つのポイント」
関連イベント開催しました
「日本の印象派・金山平三」展関連事業
美術館の周縁 ❻
兵庫から宮城へ～風が伝える復興の願い ―― 遊免寛子

コレクションから

暗い背景に浮かぶ有機的なかたちの細長いオブジェ。よく見るとこのオブジェは、女性の肉体の一部、二の腕と正座する腰とくるぶしを組み合わせたもので、背景となっているのも下を向いた女性の乳房のシルエットです。シュルレアリスムと抽象の両方の造形感覚をあわせ持ち、女性のヌードを造形上のモチーフとして突き放して扱う本作は、作者である椎原治の個性を良く示しています。

椎原治（1905-1974）は大阪市に生まれ、東京美術学校西洋画科を卒業して関西に戻り、新興写真の拠点のひとつとして全国的に知られたアマチュア写真団体、丹平写真倶楽部の中心メンバーとして活躍しました。

本作は1938（昭和13）年6月に東京の小西六で開催された第17回丹平写真倶楽部展に出品されました。同展を取り上げた『フォトタイムス』同年9月号の誌上座談会では瀧口修造、今井滋、阿部芳文らの批評の俎上に上っています。そこには作者の言葉も併記されていて、写真という色彩を持たない媒体においてこそ科学的色彩ではない詩的色彩を生み出すことができるとして、「Monochromeの力を悦びたい」という写真に対する真摯な思いが語られています。

（小林　公／当館学芸員）

椎原治（1905-1974）
《或るコンストラクション》
1937年
ゼラチンシルバープリント
48.4×30.4㎝
平成23年度購入

©Tamotsu Shiihara

QUARTERLY REPORT
ART RAMBLE
VOL.35
2012年6月30日号

金山平三の人と芸術ー今後のために

西田桐子・相良周作

N（西田）　閉幕を明日に控えた今、「日本の印象派・金山平三」展（会期:4月7日（土）～5月20日（日））担当の二人で金山平三の芸術について今一度語り合ってみたい。金山平三の人と芸術について徹底的に語り合って「腑に落ちたい」のだが。

S（相良）　確かに話すだけ話してすっきりしたいという気がしてくる。でも謎の多い人だし、資料の整理・分析、その他の調査などしないといけないことが沢山あることが分かって、結局すっきりしないということになると思うが。

N　企画展示室3室を使って150余点を並べたが、その量自体に、常設展示の記念室で20数点を見るのとは違う何かがあると思う。一般のお客さんからそのことを指摘する声が多く出た。これだけの数を一度に見て、あらためてよい画家だと思ったという感想もある。大きい作品もよいし、小さいのもよい。風景ばかりでなく人物もよくて、しかも「売り絵」的なものがない、という。

S　これだけの数の作品を時系列で並べると、語弊があるように聞こえるが、この画家の「変化のなさ」というものに気づいてあらためて驚いてしまう。変化がなくて退屈というのではない、心地よさに通じる「変わらなさ」なのだが。

N　それでも時期に応じて、写生地に応じて若干の様式の変化はあると思う。

S　ただ、作者の中に確固としてある何かはやはり変わらず、それを異なる写生地で実験しているのであって、あそこを描きたい、ここを描きたいと旅行をしているのではない気がする。

N　確かに、らく夫人に宛てた手紙を読むと、ここは「描ける」、あそこは「描けない」をしきりに言っている。頭にすでに描くイメージが出来上がっているという感じだ。

S　また、一枚一枚の絵に盛り込まれた情報量はかなり多い。そして、その情報自体が多様なので、見ていて退屈しない。

N　風景を見るというより、風景を読んでいるという感じ。

S　「描ける」「描けない」は、そのあたりのことを言っているのだと思う。

N　「変わらなさ」ということに関して言うと、ここに集めた作品は、自ずから残った作品から選定されているのではなく、作者の「後世に自分の作品を残す」という強い意思によって残された作品から選ばれているので、その「変わらなさ」も作者の意図した自身の芸術の見せ方なのかとも思う。

S　もちろん描きたいことを描きたいように描いたのだろうけれど、自分の芸術とその形成によほど執着していた気がする。自身の作家像みたいなものに。

N　「金山平三」になるのだ、という本人の意思というか、「金山平三」を生きるのだという強い思いを感じる。

S　らく夫人もそう。勉強していた数学でやりたかったことを「金山平三」でやった、という感じ。

N　今回、『金山平三画集』（日動出版、1976年）と評伝『金山平三』（日動出版、1975年）についても少し考えて、編集者の大塚信雄氏と著者の飛松實氏の労力を賛嘆するほかないと思ったが、それでも画集編纂、評伝執筆自体が、平三とらくの手のひらの上でのことだとも感じた。何というか、二人が遠隔操作しているような。

S　当館学芸員の多くは、評伝による伝説化みたいなものがあると思ってきたが。

N　その伝説化も二人の望んだことだと思う。ただ、今回の展覧会の準備で、らくに宛てた金山平三の手紙が出てきたことは大きい。全部ではないし、現物ではないのだが。

S　『画集』所載の詳細な年譜の根拠になったもので、最重要の資料なのだが、当館の資料にはなくて、長く探していたものだ。

N　「評伝」では金山平三の人生を語るものとして、結婚にいたるまでの文面が多く引かれている。それ以外は写生地かららくに宛てた葉書がほとんどで、天気のことや、今度はこちら方面へ向かって、いついつ帰るというようなことが書いてある。短いものが多いが、読みこめば、金山平三が写生地に何を求めていたか、制作をどう進めていたかがわかると思う。『画集』と「評伝」の段階ではまだこの資料を制作の実態の解明に結びつけるまでいっていない。

本展のポスターに使用した作品。「金山平三のイメージと違う。雪景色が起用されると思っていた」というのだがー。金山といえば《大石田の最上川》を含む雪景色、という固定的なイメージが意外と強く根を張っているのに気付く。しかし、会期は春。「春になったら、みんなでHEIZO」のコピーを付した。

《林檎の下（ブルターニュ）》1915年

《洞爺湖》1939年

会場入口付近の様子

S　これらの手紙をもとに、金山がいつどこへ行ったかが『画集』年譜にまとめられているが、巡回館であるひろしま美術館の水木祥子学芸員が、それを利用して金山平三の足取りを地図に落としこんだものを図録に掲載した。

N　これは意外に誰もやってなかったこと。

S　全国津々浦々といいながら、明らかに空白地帯があって面白い発見だった。

N　四国が全然なくて、近畿地方、中国・山陰もなし。九州は長崎と鹿児島ぐらい。

S　でも北海道と沖縄はあるという、この単純な事実!

N　単なる経由地や宿泊地が含まれていて、地図上にある全ての場所で絵を描いたというわけではないのだが。らく宛ての手紙を読む限り、いつどこへ行くかという1年の使い方は、長い間にかなり綿密に組み立てられていて、1年のどこかに例えば四国を組み入れようとすると、今度は別のところで描きたい、あるいは描くべきことが描けないというようになってしまうのだと思う。

S　確かに沖縄と北海道では、いい作品は出来たけれど、とどのつまりは観光旅行っぽい。いずれにせよ、交通機関とか快適な宿泊先のあるなしなどインフラ整備ができていてこそ行ける写生地というわけだ。

N　そういう点でいえば、戦前の下諏訪は断トツで重要な写生地。他所へ足を伸ばせる交通網もあるし、お気に入りの宿屋もあった。ここでじっくり腰を据えて、いろいろ験（ため）せたことが、その後の制作を決定したと思う。大石田と十和田が重要な写生地であることはいうまでもない。ただ、大石田での制作も諏訪湖での探求あってこそだと思う。そして、大石田では旅行者でなく生活者であった側面が色濃く画面に反映していると思う。豪雪地帯の想像を絶する雪の多さと、人々の暮らし、変化する最上川の表情など、手紙にあるように「何を見ても面白かった」のだと思う。すべての作品にそうした眼の面白さを感じることができる。

S　確かに、下諏訪では10個なら10個あるヴァリエーション全てが確立して、あとの写生地ではそれの応用だったというような。しかし、当館には意外と下諏訪や諏訪湖を描いた作品が少ない。

N　諏訪湖を描いたものは花の絵と同様、人気があって人手に渡ったものも多いと思う。戦前に人手に渡った作品は、らくの出納帳でだいたい分かる。作品名と大きさ、渡した人の名前と金額が書いてあるが、これらの資料の分析もこれからの課題。写生地についてもう少し言うと、十和田の作品も完全にそれまでのヴァリエーションと思っていたが、現地へ行ってみると、やはり独特の植生と地勢があって、「どこでも描ける」と金山平三は雄叫びをあげたことと思う。十和田独自の空間把握、描写法などもある。また、奥入瀬渓流を描いた作品には、わかりやすい「巧さ」が全開という感じのものもある。

S　確かに、1950年代半ば以降の作品は海や空の表現に「巧さ」が妙に際立つ作品がある。それに比べると、まだ《夏の内海》などはじっくり試しながら描いていて、それがなおいっそう味わい深い。

　話を戻して、戦前の制作では《蘇州の石炭運び》や《日清役平壌戦》など、風景と人物からなる作品も重要だろう。帝展期の金山への関心から、今回雑誌に載った金山作品の評を調べてみたが、《日清役平壌戦》準備のため1925年の帝展を休んでからは帝展での位置も微妙なものになっていく。

N　でも、この時期の数年は人物表現の方でかなり真剣な探求があったのではないか。当館所蔵の不思議な未完成作や模写など、そうした前提でもう少しじっくり考える必要がある。

S　別のことに気をとられて帝展がおろそかになっているような時期が確かにある。性格の話になるが、決まった時期にほぼ決まった大きさの作品を出すということ自体が苦手な人だろう。何事も自分本位に進めたい人だから。

N　光風会などにもつきあってないし。1930年代には画廊展や百貨店などのグループ展にはよく出していて、帝展に頼らないですむような舞台が出来上がっていたのだろうか。

S　自分本位ということでいえば、他人の作品にも興味がない。滞欧期にはいろいろ見ているだろうが、それ以後は人の作品を見て学ぶ、あるいは影響を受けるということもほとんどなかったのではないか。

N　進むべき方向がはっきりしてからはそうだろう。また、はっきりしたのは相当早く、そのことと方向性の堅固さ自体に自信を持っていたと思う。今のはやり言葉でいえば「ぶれない」人、ということだろうか。結論しても仕方がないが、とりあえずこのあたりで。（文責:西田）

（にしだ・きりこ；さがら・しゅうさく／当館学芸員）

QUARTERLY REPORT
ART RAMBLE
VOL.35
2012年6月30日号

2012年度 コレクション展Ⅰ
「美術をみる8つのポイント」

速水　豊

ショート・エッセイ

2012年度のコレクション展Ⅰでは、「美術をみる8つのポイント」と題した展示を行った。

もとより美術作品は様々な見方、読み方を許す多面的な存在であり、それが美術観賞の面白さにもなる。ひとつの作品から、表わされたものの意味やメッセージを読むこともできるし、技術の巧みさに感心したり、かたちや色を純粋に楽しむこともできる。作者の性格や思想、心情を想像するのもいいし、時代の状況や雰囲気を感じとってもいいだろう。しかし、今回の展示で試みたのは、むしろそれとは逆のことである。

近現代美術になじみのない人にとっても作品を楽しみ理解するきっかけとなることを目論んだこの企画では、展示室ごとにひとつのポイントを提示し、そのポイントのみを念頭において作品を見てもらおうと考えた。美術作品の多面性を全体として提示するのではなく、視点をひとつに絞り、ほかの視点をひとまずは無視してもよいという誘いであった。

こうした視点の限定は実のところ、展覧会においてさほど珍しいことではない。何らかのテーマに沿って作品を並べる企画においては、多かれ少なかれこの種の視点、観点の誘導が行われる。だが、場合によってはこの誘導は、個々の作品に対していささか不遜な行為にもなりかねない。様々な角度からなしうる観賞の豊かな可能性を、ひとつの見方に限定してしまうからである。

そこで今回の展示において私が留意したのは、できるだけ近現代美術の流れにおいて根本的で本質的と思われる問題を採り上げることであった。ここで言う「ポイント」とは、まさに近現代美術を見るうえでの基本的な要点に関わる事柄というつもりで提示したものである。その意味でも今回の展示は入門的であり、オーソドックスでもある。ここで挙げたポイントの多くは、この百数十年間の各時期における美術の重要な課題とも関わる。

「ポイント1　いちばんリアルな絵はどれ?」で採り上げたリアリズムの問題は、まさに幕末から明治初期の洋画の導入における最重要課題であった。だが、何をリアルと考えるかは時代とともに、そして作家によっても変わっていく。次の「ポイント2　イズムを読みとれるか?」では、大正から昭和初期の前衛絵画のいくつかの代表的なスタイルを提示したが、それは戦前期の新しい絵画の様相を端的に表わすものである。

「ポイント3　どんな事件／体験?　どんな記憶／記録?」では、戦争をはじめとする現実の事件に関わる作品を並べたが、重要なのは、忠実で中立的な記録などありえず、いずれの作例にも事件に対する描き手の立場がいやおうなく示されることだ。

「ポイント4　どんな動きがかくれている?」では、具体美術協会の作例を中心に、身体的なアクションや使われた道具の動きに注目したが、これは戦後の一時期の絵画の動向における重要な要素であろう。一方、「ポイント5　どれがいちばんモダニズム絵画?」では、グリーンバーグ流のモダニズムの問題を、絵画の平面性への意識、イリュージョンのあり方に注目することで示そうとした。

「ポイント6　どんな考えか考えてみる?」では、主にコンセプチュアルな傾向をもつ作品を展示し、純粋に目を楽しませる、単に視覚に訴える作品を見るのとは異なる作品の見方を紹介し、「ポイント7　何のイメージ?」においては既存のイメージの引用、広い意味でアプロプリエーションとも呼びうる手法を採り上げた。

2階展示室での「ポイント8　景色をどう切りとるか?」では、日本画も多く含め、絵の構図や風景のトリミングのあり方を見ながら、支持体の形状や、作品が置かれる場にも着目した。

各部屋では観賞者に問いかけるような案内文をパネルで掲示し、手にとって読むリーフレットでは個々の作品の特徴を簡単に記した。企画段階でもうひとつ留意したことは、主要な所蔵品を常時公開するという美術館の使命にのっとり、コレクションを特徴づける代表作をできるだけ多く並べようとしたことだ。したがって、決して十分ではないが、これは兵庫のコレクションへのイントロダクションでもある。

（はやみ・ゆたか／当館学芸員）

会場風景　「ポイント1　いちばんリアルな絵はどれ?」

会場風景　「ポイント6　どんな考えか考えてみる?」

トピックス

今年も開催!「第11回　神戸っ子アートフェスティバル」

毎年恒例の「神戸っ子アートフェスティバル」が1月31日（火）～2月5日（日）の6日間、ギャラリー棟にて開催されました。例年、神戸市立の全ての幼・小・中、神戸市内にある特別支援学校の全学年から1点以上出品され開催されている大規模な展覧会ですが、今年度から新たに神戸市立の高等学校も参加。また、一部の幼稚園で3歳児の受け入れが開始されたことに伴い、益々充実した内容となりました。本展は、普段目にする機会の少ない子どもたちの活動を伺い知ることができる貴重な機会となっており、学校園種を越えてこれほどの作品が一堂に介することは全国的に見ても稀です。

また、作品を鑑賞するだけでなく、来場者が参加できる仕掛けも多数用意されている点も本展の特徴のひとつ。会期中には、保護者・大人向けの対話を用いたギャラリートーク、どなたでも無料で参加いただけるワークショップや美術館ツアー等、学校や美術館で実践されているプログラムを多数実施しました。特に、ギャラリートークは、一方的に解説するのではなく、来場者との対話を通じて子どもたちの作品の魅力を発見しあいながら鑑賞するもので、本展に参加している神戸市立小磯記念美術館、神戸市立博物館、当館の教育普及スタッフの他、神戸市立の幼稚園・小学校・中学校の多くの教員が毎年研修を積みながら行っています。

来年のアートフェスティバルは1月29日（火）～2月3日（日）に開催予定。みなさんもぜひご参加ください。

（遊免寛子／当館学芸員）

今年度から加わった高校生の作品展示

コレクション展Ⅰ「美術をみる8つのポイント」関連イベント開催しました

2012年度コレクション展Ⅰ「美術をみる8つのポイント」の関連イベントとして学芸員による複数のレクチャーを開催しました。

3月25日（日）には特別レクチャーとして、当館の学芸スタッフの要としてこれまで学芸部門を支えてきた河﨑晃一企画・学芸部門マネージャーが「魅力あるコレクションをもとめて」と題して講演しました。自身の退職を前に、当館のコレクションに関連してこれまで手がけた仕事や、プライベートな所蔵品とは異なる美術館コレクションのあるべき姿、兵庫のコレクションに対する熱い思いを語った1時間でした。

また、「コレクション入門レクチャー」と題する3回シリーズの講座を行いました。

4月28日（土）の第1回は「絵のリアルと様々なスタイル」と題して、明治から昭和前期の絵画について、展示作品を中心に速水が解説しました。5月12日（土）の第2回「絵画の繊細さと大胆さ」では、出原均学芸員が具体美術協会の作品やアメリカの同時代の動向も紹介しながら、第二次大戦後の絵画におけるアクションやモダニズムについて実例とともに説明しました。6月9日（土）の第3回は小林公学芸員が「美術はどう考える?」というタイトルで、現代美術におけるコンセプトに焦点をあてた議論を、展示作品の解説も交えてわかりやすく解き明かしました。3回続けて参加すれば近現代美術を見るうえでの「ポイント」がよく分かるように、と企画したものですが、いかがでしたでしょうか。

（速水　豊／当館学芸員）

コレクションの魅力を語る河﨑晃一氏

「日本の印象派・金山平三」展関連事業

金山展の関連事業は、連続レクチャー「金山平三を語る」全3回と作品を前にしたギャラリートークの二本立て。これに加えて、ミュージアム・ボランティアによるスライド解説会がありました。

連続レクチャーでは、図録寄稿者の萬木康博氏（美術評論家）による、東京美術学校から滞欧時代についてのお話を皮切りに、相良・西田学芸員が、帝展期、帝展以後の金山平三について語り継ぎました。館蔵資料をはじめ画集や評伝からの資料、美術雑誌の帝展評などを利用して、どこまで金山平三の人と芸術に肉薄し、語ることができるかに個々挑戦したわけです。

ギャラリートークは実はトークする側に楽しみが多いもの。2回とも所要時間をあっさりオーバーし、カタルシスを味わってしまいました。ご参加くださった方は、長時間お付き合いいただいてどうもありがとうございました。

ボランティアによるスライド解説会では、自身の金山平三像を胸に秘めて語っていただいたことと思います。こちらもご苦労さまでした。（西田桐子／当館学芸員）

連続レクチャー「金山平三を語る」での萬木康博氏（4月7日（土））

●── 編集後記

●今年度の『アートランブル』は、年4回発行のうち先の2回分を6ページ編成としました。第一回目の本号では、「日本の印象派・金山平三」展を担当しました当館学芸員の西田桐子と相良周作の対談を掲載しております。謎に包まれた金山平三の画業の魅力について、二人の忌憚ない意見交換をお楽しみください。
●今年度は、当館開館10周年。只今、開催中の「カミーユ・ピサロと印象派」展を始め、力の入った企画展やコレクション展、各種イベントを開催予定ですので、本誌でも逐次ご報告していきます。
●この3月に、これまで学芸部門のマネージャーとして当館を牽引されてきた河﨑晃一さんが、めでたく御定年を迎えられました。また服部正学芸員が、今年11月に開館予定の横尾忠則現代美術館に異動しました。4月1日付で、新規採用の学芸員として相澤邦彦（あいざわ・くにひこ）、小野尚子（おの・なおこ）が着任しました。どうぞよろしくお願いいたします。（小野）

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.35

2012年6月30日発行
編集・発行：兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
印刷：（株）サンメディア

兵庫から宮城へ～
風が伝える復興の願い

遊免寛子

当館でのワークショップの様子

美術館の周縁

去る3月24日（土）、当館のギャラリーにて「元気のぼりに絵を描こう!」を開催した。「元気のぼり」とは、世界的に著名な造形作家であり当館の所蔵作家でもある新宮晋氏が東日本大震災を受けて企画されたアートプロジェクトである。鯉のぼりのような形の白い大きな筒状の布に、被災地や日本を元気にするメッセージや絵を描き、風に乗せてエールを送る。それは究極の風の彫刻ともいえよう。今回当館で制作された元気のぼりは、これまでのワークショップで生まれたものと共に、今春、宮城県美術館に送られ、参加された多くの方々の思いが被災地に届けられた。

このプロジェクトは、昨年の夏に新宮氏のアトリエがある兵庫県三田市藍本の田園を会場に開催された野外展覧会「田んぼのアトリエ」（2011年6月11日（土）～9月25日（日））から生まれた。「田んぼのアトリエ」は季節の変化の中で子どもたちと一緒に田んぼで遊び、学ぼうというもので、自然から学ぶことで地球の未来の生き方を考えていく。それは、新宮氏の長年の夢である自然エネルギーで自活する村「呼吸する大地」の実現に向かっての第一歩でもあった（注1）。この時初めて関連イベントとして「元気のぼり」のワークショップが実施され、その後も地元の保育園やドイツ、アラスカから元気のぼりが寄せられた。そして当館でのワークショップの開催に至るのであるが、それはまるで運命のようであった。

兵庫県立美術館では、子どもたちが美術やアーティストとふれあう場を重視し、多様な教育普及プログラムを行っている。作品の鑑賞を中心に据えたプログラムは、前身の近代美術館から堅実に実施されてきた事業のエッセンスを継承し発展させたものであり、当館の特色のひとつともなっている。5年ほど前からは、より広く多くの子どもたちに美術に触れてもらうきっかけを作るため、アーティストを招いたワークショップを開催している。今年度の実施に際して、真っ先に思い浮かんだのが新宮晋氏であり、氏以外考えられなかった。その作品の素晴らしさは勿論、子どもたちへの思いや、ウインドキャラバンに代表されるこれまでの活動に強く打たれていたからである。

当初、こちらからは単発の企画を依頼していた。しかし、新宮氏はその狭い枠組みを一気に乗り越える「元気のぼり」のワークショップをご提案くださったのである。当館は2002年の4月に阪神淡路大震災からの文化の復興のシンボルとして開館した美術館である。10年の節目を迎える直前に開催する今回のワークショップで東日本大震災へのエールを送ることを目的とした「元気のぼり」を制作することは使命のようにも思えた。準備期間が非常に短かったにも関わらず、新宮氏ご本人を始め、新宮スタジオの皆さん、当館のミュージアム・ボランティア「こども班」の強力なバックアップにより実現に漕ぎ着けることが出来た。

宮城県美術館　北庭／開館当初から見守り続けている新宮晋氏の《時の旅人》1981年

宮城県美術館　中庭

当館でのワークショップ当日は、130名の方に参加いただき、22枚の元気のぼりが生まれた。新宮氏も驚かれるほどグループ毎に全く違う個性的な作品が生まれた。ギャラリーの大きな空間に一斉に吊り上げられた元気のぼりは力強い美しさを放ち、大空の下、風になびく姿を想像し思わず胸が高鳴った。

そして4月21日（土）、宮城県美術館に展示された元気のぼり（注2）を見届ける為に、東北のまだ肌寒い風が身にしみる仙台空港に降り立った。美術館に到着すると、元気のぼりたちは青空の下、東北の風に元気にそよいでいた。そのはためきを嬉しそうに追いかける子どもたちを目にした時、安堵と喜びが胸に迫り、しばし感慨にひたった。阪神淡路大震災を経験した兵庫県から東日本大震災により被災された宮城県に今、このタイミングでエールを送ること。当館が果たすべき役割のひとつを果たせたような思いでもあった。

その日、宮城県美術館では新宮氏の講演会が開催され、翌22日（日）、「元気のぼりワークショップ」が開催された。筆者も新宮氏の古くからのご友人を中心に結成されたチームの一員に加えていただき、宮城県美術館の教育普及担当の強力なメンバーと共にワークショップのお手伝いをさせていただいた。61名の参加者による19枚の元気のぼりは、これまでに描かれた78枚ののぼりと共に中庭に掲げられ、見事な泳ぎを見せた。当初、単発のワークショップで終わってしまう予定だった今回の事業が、時間と空間を越える大きなプロジェクトの一部となったこと。それは、新宮氏・参加者・その目的に賛同し支えた多くのスタッフの思いがひとつになった証である。

時に自然は猛威を振るい、我々はその圧倒的な力の前では為すすべもなく立ちつくすだけの存在であることを今回の震災では改めて思い知らされた。その中で美術が果たせる役割が本当にあるのだろうか。それは今回も多くの美術関係者が感じたことである。新宮氏は「心から心へ、愛と元気を伝えること」（注3）こそがアートの力だと示された。常に自然の力と向き合われてきた新宮氏だからこそである。

（ゆうめん・ひろこ／当館学芸員）

（注1）展覧会リーフレットより。なお、自然エネルギーの村「呼吸する大地」展が2011年6月11日（土）～9月25日（日）、当館ホワイエにて開催された。

（注2）元気のぼりは、5月20日（日）まで展示された。

（注3）「田んぼのアトリエ」リーフレットより